

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 〔談話室〕 綱渡りの日々

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野呂, 健, Noro, Ken メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00000258">https://doi.org/10.57529/00000258</a>

## 綱渡りの日々

野呂 健

「國學院雜誌は毎月発行、年に十二回発行しています。」と大学関係者や研究者仲間に話すと、「嘘だろ!」「あり得ない!」「一年一回発行の紀要ですら原稿が集まらなくて苦労しているのに、毎月だなんて!」というのが平均的な反応です。ウソもイツワリもあります。國學院雜誌は毎月発行しています。しかも、百年以上続いています。戦後、様々な事情により、休刊になった時期が多少はあります。百年以上の継続を伝統とか歴史といった言葉で表現することは易しいけれども、一定の水準と品位を維持して連綿と続けることの意味と重さは、編集作業の当事者でないと容易には理解できないでしょう。

國學院雜誌の基本的構成は、巻頭論文、投稿論文、談話室、書評あるいは図書紹介となっています。年一回、特集、座談会、学生懸賞論文等を設定します。巻頭論文は、専任教員に一年くらい先まで予定を組んでありますので、何とか入稿が期待できます。研究の余暇話の談話室も千六百字ですので問題はありません。しかし、投稿論文は「あなた任せ」にならざるを得ません。手持ちの論文が底をついて、毎朝のあいさつが、「来た?」「だめです。」となると、絶望的な気持ちになります。通りすがりの神社仏閣に心の中で手を合わせることもしばしばです。「来ました!」となっても、査読という関門があります。査読で掲載不可となれば、目の前が暗くなります。「ぬか喜び」なんていう言葉もあつたな。「ぬか」はどういう漢字だったっけ、と虚ろに空を眺めます。國學院雜誌もよりによって私の代で休刊か、編集長としては進退何か、と思ったことも二度三度とありました。タイトロープから落ちるとはこういうことか、と実感します。ああ、セーフティ・ネットがほしい。

何しろ投稿論文には到着時期にムラがあります。来るときはまとまってきましたが、来ないとなると全然来ません。夏休みに時間が取れるからでしょうか、九月は比較的数量が出ます。秋から初冬にかけても、昇格や就職がかかわってくるので、そこそこ集まります。しかし、予測は全くあてになりません。保証のない世界の怖さを実感します。また、たくさん論文が集まると今度は、掲載するまでに時間がかかり、お叱りを覚悟しなければなりません。まあ、泣きはこの辺にしましょう。

ところで、國學院雑誌は意外に進化していることを知ってください。私が國學院に奉職して、初めて國學院雑誌に論文を書いたとき、横書きは認められませんでした。英語専攻でそれまで横書きでしか論文を書いたことがなかった私は大いに戸惑いました。大げさに言えば、國學院には日本語の神髄があるのだと認識させられた瞬間です。縦書きと横書きでは表出されるものが全く異なります。まだワープロの時代だったので、設定がうまくいかずに苦労しました。今は、横書きも認められています。

また、平成二八年十一月の特集号で、國學院雑誌史上初めて全体が「カラー印刷」の論文を掲載しました。絵画の色彩にかかわる論文でしたので、白黒では意味が薄れてしまうと編集委員会が判断し、印刷技術の進歩により予算内で収まることを確認して採用に踏み切りました。今後も必要に応じてカラーにすることはあるでしょう。英断と言ってくれた方もいらっしゃいますが、昨今料理の本だって白黒では売れません。カラー印刷は今日の標準です。

ただ、表紙の「國學院雑誌」の書体はいじっておりませんし、変えるべきではないと思います。國學院雑誌は國學院大學の「顔」だからです。

國學院雑誌の編集長は文学部長が兼ねることになっているため、四年間編集長を務めさせていただきました。編集委員の方々、広報課の方々、原稿をお寄せいただいた方々、熱心な読者の方々のご理解とご支援がなければ、確実にロープから落ちていたことでしょう。皆様のおかげでロープから落ちないで済みました。心から感謝いたします。

(英語学)